

鏡越しに見た彼女の表情は、少し微笑んだ口元で、上目遣いに僕を見つめていた。

お気に召さなかったらしい。

なので、それまで編んでいた彼女の髪をすぐにほどくと、さらさらっと溢れるように広がった。

彼女の細く軽い髪は再度くしをあてずとも、くせひとつ残ってなかったけれど。僕はもう一度くしを取り上げ、ゆつくりとすぐ作業からやり直す。

その間、彼女はじつと正面の鏡越しに、僕を見てるのか見てないのか。まっすぐ前を見つめている。

どうやら今日はご機嫌らしい。

それで結局、散々髪型に悩んだあげく、今日の彼女の髪型は、そのままのストレートに収まった。

僕の一番好きな髪型。

彼女に一番似合う髪型。

僕が彼女に一目惚れして告白した日の、彼女の髪型。

僕が家を出たのは結構早い時間だったけれど、なんだからだで始業間際の時間になっていた。

階段を降りると、彼女の母親がリビングから見送りに出てきたので、「行ってきます」と、

……。

ああ、うん。

「今日はちよつと寄り道してきます」

彼女の表情からそう伝えて、僕らは彼女の家を後にした。

\*\*\*

あまり品の良いことでもないけど、僕はなんとなくだけど、相手の表情から、どんなに無表情だろうと相手の思っていること、考えていることを読むのが得意だった。

それは物心ついた時には、もうそうなっていて、多分うちの家庭環境がアレだったせいでもあるのだけど。

両親が分かれて父親に引き取られた頃には身に染み付いたものになっていた。

でも、まあ。そのおかげで、しゃべらない彼女の言いたいこととか思っていることもちゃんとわかるんだだけど。

彼女、僕のつきあっている彼女はしゃべらない。

無口というわけじゃなくて、一切。全く。一言も。

別段そういう病気とか、先天的なーとかでもなくて。

付き合いだした頃はそれこそ、鈴のように綺麗な声でよく笑ったりもしてたけど。

ある日突然。声を出すことをやめた。

僕に対してだけじゃなくて、学校の友達にも、先生にも、両親にすら。

誰に対しても、一切。声を発することをやめてしまった。

悪いことがあったわけじゃない。

嫌なことがあったわけでもない。

なのに突然。

当然周囲は困惑したし、理由もわからないから、筆談でもいいからと、それすら彼女は、微笑みを返すだけで。

せめてもの救いは、Yesなら頷いて、Noなら首を振る。でも、それだけだ。

それだけでは、コミュニケーションは成り立たない。

それでまあ、ひっぱり出されたのは普通に彼氏の僕だった。

しゃべらなくても、表情を見れば思っていることがわかる。

特に言いふらしたりはしてないけど、僕が近くでフオロ

ーしているうちになんとなく、こいつがいれば意思疎通は可能らしいということが周囲に伝わって。

結局、もともと同じクラスだったけど、席も隣に移動し

て、授業中であてられた時の代返とか、彼女の交友関係のつなぎ役とか。

朝と夕方は彼女の家まで送り迎えするついでに、一緒に

ご飯をご馳走になることも増えた。

そんな生活を続けている彼女の本心は、実は最初からわかつてはいたのだけど。

席を隣に、とか、自分の周囲の人間と近づける、とかは、

ほんの副次的なもので。

彼女の本当の意図は。

何かを得るためには、同じくらいの対価が必要だというけれど。

「告白したの僕からなんだけどねー」

それにそこまで独占欲、強くないんだけど。僕。

でもそんなこともお構いなしに単に対価だけ支払われてしまったら。

律儀な人だったら受け取ったりしないだろうけど。

そこまで律儀な人でもない僕は。もらえるものならもら

っておく主義なので。

特に、欲しいものなら。なおさら。

「……ん？」

隣を歩く彼女が目線を寄越してきたので。

「ただちよつとね」

と返した。

朝の日差しは少しずつ熱を上げていて。

今日も暑くなりそうで。

さて、

「今日のデートは、どこに行こうかなあつて」

眇めになってるので、結構喜んでるみたいだった。

そんな朝の登校風景。